第55回学校読書調査

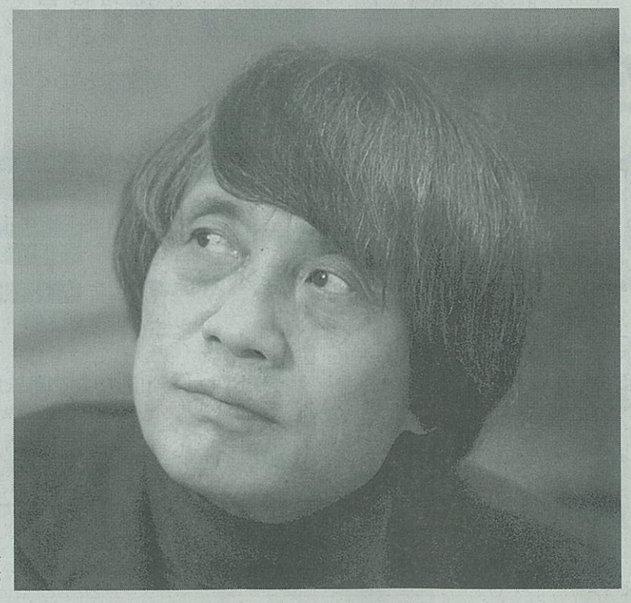
きょう27日は「文字・活字文化の日」。毎日新聞などがこの時期にまとめている恒例の「学校読書調査」は、今年で55回目を迎えた。書店の新刊コーナーは日々入れ替わる一方、一冊も本を読まない子どもも少なくない。なぜ成長期に本が必要なのだろうか。建築家で国民読書年推進会議座長の安藤忠雄さんに寄稿をお願いした。また、ブログで年間200冊以上の書評を公開している橋本大也さんに、読書の楽しみ方を教えてもらった。

ホンヨモ！

子ども読書推進運動進行中！

十兵衛に勇気もらった

寄稿 建築家 安藤忠雄さん



あんどう・ただお　1941年大阪生まれ。独学で建築を学び、69年安藤忠雄建築研究所設立。環境とのかかわりの中で新しい建築のあり方を提案し続けている。代表作に「光の教会」「大阪府立近つ飛鳥博物館」「淡路夢舞台」など。79年「住吉の長屋」で日本建築学会賞、93年日本芸術院賞、95年プリツカー賞、03年文化功労者、05年国際建築家連合（UIA）ゴールドメダルなど受賞多数。91年ニューヨーク近代美術館、93年パリのポンピドー・センターにて個展開催。米エール、コロンビア、ハーバード大の客員教授歴任。97年から東京大教授、現在名誉教授。

私は、大阪の下町で生まれ育ちました。周りの人々は貧しいながらも支えあって生活し、まち全体が生命力に溢れていました。そんな環境ですから、家の本棚には哲学や文学の本など皆無で、もちろんモーツァルトや、ベートーベンの音楽とも全く無縁、およそ文化的というには程遠い子ども時代を送ってきました。

建築の道を進もうと考えたのは10代の終わりのころで、まずはどのようなことを勉強すべきかと、関西近郊の大学をのぞきに行ったのですが、講義内容が全然わからない。文化的知識量が全く足りていなかったからです。同世代で同じく建築を志す友人たちと話をすると、幼少のころから古典音楽を聴き、小・中・高で森鷗外や夏目漱石をはじめとした文学作品に触れている人が多いことに驚きました。急いで本を読みはじめましたが既に手遅れの状態で、長年文化的な生活に慣れ親しんできた人たちには追いつきようもない。彼らは本当に豊かな子ども時代を送ったのだなとつくづく羨ましく思いました。

私といえば、皆が文化的知識を吸収していた幼少期に、魚を釣ったりトンボをとったり、ソフトボールをしたり紙芝居を楽しんだりして、非常に典型的な子ども時代を過ごしました。放課後はほとんど自由時間。勉強は学校でしかせず、教科書類は全て学校に置いたまま。宿題も学校で済ませ、校舎を出たら全力で遊ぶ。年の離れた子どもたちとの交流や、自然環境の中から、命に対する愛情など、生きていく上で最も大切なことを学ぶことはできましたが、いわゆる文化的素養を育む機会はありませんでした。

中学2年のころ、生まれ育った長屋の2階を増築した時に、一心不乱に働く大工さんを見て、建築という職業に強い興味を覚えました。ここまでのめり込める仕事には、きっと何か面白いものがあるのだと、深いところに隠された魅力に直感的に気付いたのです。それがこの仕事にひきつけられた最初の経験でした。

結局、家の経済的事情と、学力的な問題もあって、大学行きは断念せざるを得ませんでした。それでも中学のころに見た大工さんの姿が忘れられず、独学でも建築の道を歩もうと決心し、周りの人たちに少しでも追いつこうと、そこから必死で本を読み始めます。将来に何の保証もなく、不安で一杯のスタートでした。しかしそんな私の決意を固めるきっかけとなったのが、このころ出会った幸田露伴の「五重塔」という作品です。物語には、のっそり十兵衛という、理解を超えた魂を持った大工が登場します。こののっそり十兵衛の姿が子ども時代に出会った大工の姿と重なり、建築とは魂でつくりあげる仕事なのだということを漠然と理解することができたのです。それは、文化的素養も、社会的基盤もないまま建築の世界に飛び込もうとしていた私に、勇気を与えてくれました。

この後も、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」や、和辻哲郎の「古寺巡礼」など、建築を学んでいく中で、優れた文学との様々な出会いがありました。即物的で、現実的である建築と、文学とは根本的に違う世界ですが、文学の世界を通してこそ見えてくる建築の奥行きがある。今も新幹線での移動中や、就寝前には必ず本を読んでいます。読書は、その場に居ながらにして、様々な世界への「心の旅」を可能にし、想像力を刺激してくれます。

若い人には、できるだけ多くの本を読んでほしいと思います。読書を通して、他人や命に対する愛情、深い思考力を培い、奥行きのある人間になってほしい。日本人の多くは、社会に出ると本を読みません。しかし本は心の栄養であり、人生を真の意味で豊かにしてくれます。次の時代を切り開いていくためにも、本物の価値観を持った若者が一人でも多く育ってくれることを期待しています。

（写真はワイド版岩波文庫「五重塔」）

読んで書いて より深く

ブログー・橋本大也さんに聞く

＝西本勝撮影

大学在学中の90年代半ばにITビジネスを始め、日本のインターネット業界の草創期から活躍している橋本さん。コンサルティング会社「データセクション」会長として多忙な毎日を送る一方、03年9月からブログ「情報考学」で書評を書き続けている。その数は1000冊を超えた。

「昔から本は好きでしたが、ブログの登場で、私の読書は大きく変わりました」

新聞記者だった父親の影響か、子どものころから読むのも書くのも大好き。「本ならいくらでも買ってもらえた」ので、書店によく通った。ブログを始めてさらに読書熱が高まり、年間約500冊を手に入れ、約300冊を読破。200冊程度を評している。通勤に片道約1時間20分かかるため「電車内と寝る前とで、1日ほぼ1冊読める」という。

多忙な中、書評の執筆時間を確保するのは大変なのでは？「全く逆。書かないと損をした気分になる」と話す。「読書の楽しみの一つは自分の内面が整理されていく感じがすること。ただ言葉にしないまま終わると、感じているんだけど理解できないところで終わる気がするんです」

ブログは思わぬ広がりも見せた。アクセス数が増えると、著者や編集者が感想を寄せることも。ある大学教授の本を紹介したところ、その教授に招かれ、講義を担当することになった。「アウトプット（書くこと）とインプット（読むこと）が互いにいい影響を与え合う循環が始まった。インプットだけだと発展性がない。そのバランスが大切なんだと気付かされました」

だから、子どもが感想文を書くことは大切だと感じている。「当時は『やらされている』感じで、何を書いていいのか分かりませんでした。今なら、他人にその本を手に取ってもらえるように書く。その本の何がいいのか。人に説明する前提で読むと、深く読めるような気がします」

橋本さんが本の魅力を知ったきっかけは、小学校高学年のころに出会ったミヒャエル・エンデ著「モモ」。子ども向けの本とは違う「哲学っぽい内容」に夢中になった。ただ自身の読書遍歴を振り返っても、人生に影響を与えるような本は「100冊読んで1冊ぐらい」。「そんな本に出会う前にあきらめて、読書をやめちゃう子が多いのでは」

いま、子どもの周りにはテレビやゲーム、携帯電話、インターネットと、情報を得るメディアは多い。そんな中で「1冊」に出会うのはさらに大変だ。橋本さんは、自分にとって面白い本の探し方を次のようにアドバイスしてくれた。

「感性の近い友人やちょっと先を行く先輩が紹介してくれた本は共感して読みやすい。また尊敬している先生のお勧めも、参考になります。そして何より読みたいと思ったら、その気持ちのうちに〝即読〟すること。より吸収できますし、自分にとっていい本になる可能性が高くなります」【聞き手・佐々木浩材】

はしもと・だいや　1970年生まれ。ブログー。データセクション会長。早稲田大在学中にインターネットの可能性に目覚め、IT系ベンチャー企業を創業。主な著書に「情報力」「情報考学――WEB時代の羅針盤213冊」など。デジタルハリウッド大准教授、多摩大大学院客員教授も務めている。